

現代における〈私〉の存在

村上 則 夫

目 次

1. 序 言 —問題の所在と提起—
2. 生命・人間・〈私〉
 - (1) 生命・環境・システム
 - (2) 人間ということと〈私〉という存在
3. 現代社会の中の人間 —〈私〉の生活—
4. 情報化の進展と生活情報化
5. 結びに代えて —若干の知見—

1. 序 言 —問題の所在と提起—

いつの時代であれ、幾つかのシステムの変革が試みられ、いろいろなものの価値や意味が問われ、一つの大きな潮流があり、とかくそこに「生きている」人間にとっての困難な課題がある。

「情報化」という言葉は、「高齢化」、「国際化」ないし「ボーダレス化」などという言葉と並んで、現代社会を際立たせる特徴であり、現代においては様々な分野・領域を超えて、既存の枠組みにとらわれない横断的な形で語られている。「情報化」は、しだいに沈静化し、やがて消え去る一過性の流行語や焚火^{たきび}ではなく、一つの潮流となって、強力な流れを形成し様々な解釈や論説が容赦なくうみ出されている。そして、「現代」という時代における情報化の進展は急速である。そこに、後退はむろんのこと、少しの停滞すら感じない。とにかく動き、ゆらぎ、そして変化している。“いまだ

に”ではなく、“もうそんなに”という形で表現されるような素早さである。

これまでも指摘されているように、「高度情報社会」といわれる現代社会では、つい最近まで人類が手にすることのなかった高度で、かつ多様な機能を備えた情報メディアが広く普及し、利用され、様々な形態の膨大な量の情報が否応なく―「生活者」としての人間の必要性や要求と関係あるなしにかかわらず―日々降り注いでいる。現代社会というのは、別の表現を用いれば、情報量の豊かな社会であり、情報メディアの豊潤な社会ともいえ、日増しに情報量はますます増大し、情報メディアもますます豊富化・多彩化しつつあるのである¹⁾。特に、今日では、情報ネットワークの中に電子的に形成された「ヴァーチャル」(仮想)な空間、そしてそこに展開される不思議な「仮想世界」(virtual world)が、現実世界における広範囲な領域に大きなインパクトを与えはじめ、我々の日常生活にも少しずつ浸透しつつある。しかしながら、その反面、社会全体の発展にかかわる担い手の一つが科学技術の発達と情報化にあるとはいえ、現代では飛躍的に高度化しつつある科学技術と情報化の急速な進展などに呼応して派生した、過去に類をみない容易に解決困難な問題があまりにも多すぎるように考えられる。「激変する現代社会には、数多くのパラドックス (many paradoxes) が存在する²⁾」としたネイスピッツの表現を借りるまでもなく、現代を生きる人間は幾つもの深刻なパラドックスに直面しているのである。

時間の経過とともに、複雑に交錯した問題がつぎつぎと産出され、しっかり解決しないうちに、また新しい難問が産出され、そのまま社会が進行していく。そして、数多くの人間が自分自身の存在、生き方、あるいは人生の意味について、これほど内面的安定感や精神的バランスを失っている時代はない。人間同士の過激な競争などによる、いわゆる目には見えない“内戦”状態から、心の平安が乱れ不安と苦悩を深めているのである。換言すれば、人間の存在の意味を見失い、自分自身の「存在」の価値を失い、

「生命」(ないし「いのち」)の充実感と満足感を喪失し、思いがけぬ罅に足をとられ、日常生活は怠惰で生活感情が枯渇しているともいえよう。しまいには、周囲の人間が啞然とするほど、突然、突発的な自己破壊行動へと走ってしまう若者も驚くほど増えているのである。人びとは困惑し、疲労し、そして叫んでいる。しかし、その叫びはどこに消えてしまっているのだろうか、と思いたくなる社会的事件が多発していることは、周知のとおりである。我々はその何を読み取り、何を考えるべきなのであろうか。

このような時代の流れを鋭く肌を感じている以上、情報化の急速な進展にかかわる様々な最先端の動向に敏感でなければならない。しかし同時にまた、ややもすると、語るにためらいがちな人間の「生」—存在している“生命のリアリティ”とでもいおうか—について、そして、現代に生きる人間、すなわち、「いま・ここに」に生きる代替不可能な自分自身の「存在」について試行錯誤をとめないながらも真剣に考え、その「存在」を確認することは意味のある作業であると思う。確かに、このような問いそのものは古いものであるが、我々は、いま「人間」という存在や意味、さらに現代社会に生きている人間の在り方を問わなければ、大切な「生命」や一人ひとりの人間の尊厳がしっかりと確立された社会システムの形成が難しいのではないだろうか、と考えている。いま、少なくとも、答えを見いださなければならない不可避の課題であると思う。

そこで、本稿では、「現代における〈私〉の存在」というテーマを設定して、これから、情報化の急速な進展が人間一人ひとりや種々のシステムにどのようなインパクトを与え影響を及ぼすかについて理論的、実践的に検討し、かつまた、遠い未来を見据えつつも、人類の目前に迫っている21世紀社会システムの望ましい全体像などを問う意図を秘めて、ここではそのための予備的な考察を試みてみたい。

2. 生命・人間・〈私〉

(1) 生命・環境・システム

生命体は複雑系である。人間や人間社会もまた非常に複雑なシステムであり、全体として、精妙で極めて複雑な振る舞いをみせる一つの系（＝システム）である。

人類が長い長い歴史をかけて構築してきた世界経済システム、国際政治システムないし地域社会システムなど、複雑なシステムを容易に実感させられる例は多いが、とりわけ、人間の身体そのもの、イヌやネコなど家庭で飼われている動物や庭の草花といった生きているものはごく身近な生命体（＝生命システム）としての存在といえよう。さらには、生態系や銀河系など巨大なシステムも存在している。システムとしての人間はまた、自ら生きるために数えきれないほど様々なシステムをつくり上げ、そのシステムの中で暮らしているともいえる。そして、現代においては、短時間に新しいシステムが次々につくられ—それが逆に、人類の危機をもたらし、破滅への道を整えつつあるかもしれないが—、平凡な生活を過ごしているごく一般的な人間にとっては、一種のおどろきと困惑の連続である。

ところで、生命体（＝生命システム）は、その生命体を取り巻く複雑な環境との間で、持続的かつ選択的な物質、エネルギー及び情報のやりとりを行い、環境の出来事に反応しつつその存在を維持し成長している開放系である。あらゆる環境もまた、複雑なシステムの一種であり、環境から完全に独立し、環境との相互的な関係のない生命体など存在しない。従って、環境破壊とは、すなわち、生命体そのものの破壊行為を意味しているといえる。なお、複雑な環境という場合の「複雑」という言葉は科学的な言葉であるが、「極めて複雑」という概念は、「どんな生き物をもってきても、その状態を原理上予見できない不確定性があるということである。環境の中の生き物は予測していないことがおきても、それに適切に対応したり、適応したりして生きていかなければならない³⁾」。とりわけ、「情報」のやり

とりが生きものの生存にとって持つ明確な意義は、依然としてまだそれほど解明されていないといわれているが、予測しがたい複雑な環境からくる様々な刺激や環境の変化を情報として鋭敏に受容し、判断・伝達して、刺激や変化に適切に対応したり、適応することが生きものの生存にとっては重要な条件の一つと考えられている。換言すれば、「各細胞や組織・個体から社会に至る生物のさまざまな階層において、どの部分の情報伝達が停滞しても、生物は個体としての死、あるいは種としての滅亡の危機にさらされることになる⁴⁾」のである。

一般的に、システムの特性は、それを構成している要素（部分）をバラバラにして、たとえすべての一つひとつの要素（部分）の性質・特性が理解できたとしても、システムの全体の性質・特性や振る舞いとイコールではない。あるシステムを構成する複数の要素は、非常に多様性が高く非因果的で一定の法則性に従わず、相互に複雑に絡み合い影響し合い、さらに変化や発展をしつつ成り立っている。「私たち人間の個体は数十兆にも及ぶ数多くの細胞から構成されている。細胞は、さまざまな臓器を形成し、さらに臓器の間は血流でつながれ、相互に依存し合うことによって個体の全体性が守られている⁵⁾」のである。ただし、ここで、我々が注意し、また誤解を生ずるであろうと考えるのは、「全体」ないし「全体性」という言葉についてである。この「全体」ないし「全体性」という言葉から、しばしば誤解を招くのは、いまわしい全体主義 (totalitarianism) との混同である。ポパーは、全体主義批判の書として流布されている『歴史主義の貧困』(The Poverty of Historicism) の中で、「全体」という語の使い方についての曖昧さを指摘し、科学的研究の対象とされる「全体」とは、「当該の物事のある特別な諸性質もしくは様態、すなわちその事物をして『単なる堆積物』よりはむしろ、一つの組織された構造と見えさせるような、特別な諸性質である」と指摘していた⁶⁾。

過去において、機械論、還元主義が陥ったように、要素（部分）を物理・化学的過程に還元し、個々独立した要素に細分化・分析して理解すること

は、生命体の全体としての本当の姿、すなわち、システムの全体像を無残にも見失い喪失してしまう危険性ははるかに高い。例えば、生きものの神経系や免疫系など見事な機能を正確に理解するには、それらの全体的機能を損なうことのない形でなければ到底困難であろう。

人間というのは、誰も、自分自身が精緻で高度な物質的機械や一つひとつの部品に還元可能な塊などではなく、極めて自由度の高い生命的存在、自由意志を備えたまったく分割不可能な生命的存在であることを直観している。我々人間は、誰もいずれ老い、そして死ぬことになる。人間のこの世の生命は、身体の「死」とともに終わるが、このような「死」は部分的ではなく、生命体全体の死なのである。システムの死である。「生」ある人間の存在は、DNA を設計図とした単純な蛋白質の集積体、あるいは個々の単なる人体を構成する多数の細胞の集合体であると考えすることはできない。生命科学の研究者によれば、「生命は部品のすべてを分析しつくした時に理解できるものではなく、ゲノムの中に書き込まれた歴史物語（これはそのゲノムを持つ生きもの自身の生い立ちと他の生きものたちとの関係の両方が絡む）を読む必要がある。DNA の分析は不可欠だが、それは生きものをバラバラにする行為ではなく、生きものが語る物語の一つを読みといているのだという意識になる。こうなると自ずと、自分の調べている対象だけでなく、その全体の中での位置づけ、つまり関係に興味があわく⁷⁾」と述べている。

また、多少考える視点を変えて、人間の「生」が非常に巧妙な複数の生命細胞の集合体として成立していると考えた場合、「人間は、廃物利用される間は利用されるにしても、いずれ朽ち果てるほかない存在である。人間をそのような代替可能な細胞の集合と考えるならば、いずれ健全ならざる細胞しか提供できない人体は、それだけ価値において劣ると考えられることになるであろう⁸⁾」という考え方も生ずるかもしれない。このような事態は、人間存在にとっても実に恐ろしく、生命の尊重や人間の尊厳という問題からも極めて危険性が高いといわざるを得ないだろう。人間は、この

世に偶然に何の目的もなくわき出た存在ではない。はっきりと意味のある存在＝有意味な存在としてこの世に誕生したのであり、生まれるにも、生きるにも、そして、死にも意味がある⁹⁾。人間には、その在り方に違いがあり、様々な人生があり、その強弱はあるにせよ、人間を愛し愛される対象である。愛したり愛される対象としての人間が、「複数の生命細胞の集合体以外の何ものでもない」とする捉え方に関しては、多くの人間が率直に異論を唱えることであろう。

中村氏はいう。「20世紀に入って急速に進歩した生命の科学的理解は、今また新しい展開をしているというのが、科学の中にいる者の認識である。ところが、科学の外の世界では、これがまた充分理解されておらず、科学者といえば、生きものであると単なる物体と捉え、それをバラバラにすればすべてが理解できている人間と思われている¹⁰⁾」と。このような主張に関しては、我々も同意見であるが、研究者の研究内容・成果に関する情報公開の仕方にも問題があるのかもしれない。「生命とは何か」という問いは、今後の科学の世界においても、重要な課題として生き続けることは議論の余地を残していないが、生きている状態にあるシステムは、ベルタランフィが示唆しているように、「システムを崩せば生命も消えさせる¹¹⁾」ことの認識は、多くの研究領域・分野で高まりつつあるといえよう。

(2) 人間ということと〈私〉という存在

ここでは、上述した生命体に対するシステム論的な立場からの展開方法を変えて、人間社会一やはり、システム理論では「生きている」系と捉えるが一において懸命に「生」を営む人間という前提のもとに、種々の事柄の検討を進めていきたい。

人間は行為する。人間は生きている。人間が「生きる」とは、とりもなおさず生き続けることである。「在り」続けることである。生きている確かな実感のもとに存在することである。それは、この世の「死」までの連続的な過程（プロセス）であり、非連続や中断は許されない。生きるという

ことは、日常生活においては非常に生々しいことでもある。暉峻氏が指摘しているように、「もともと、生きる、とは生命力の全体的な発揮¹²⁾」であるならば、後述する人間の「生活」とは、一人ひとりが持っている生活意識と生命力の総合的な発揮において実現される、実にダイナミックな営みであるとも説明することができるだろう。

さて、「人間」とは、本来何なのか。この問いは、執拗に我々に迫ってくる。人間が生物学的には、哺乳綱、霊長目に属し、ホモ・サピエンス (Homo sapiens) という種名をもつものであることに異論を唱えるものはいないだろう。そしてまた、ミードの哲学的考察を引き合いに出すまでもなく¹³⁾、人間は際立って社会的な生きものである。極めて社会的な存在である。自分という人間以外の他の複数の人間なしには生きていくことができない。人間を肉体的にも精神的にも人間たらしめるのは、自分自身ではなく、複数の「他者」とのかかわりにおいて可能となる。本来的に、人間というのは生得的な能力（本能）の幅が極度に狭く、幼児は密接な対人関係にはいることで、初めて健康に成長するのであり、その欲求や能力及び気質も自分以外の人間との対人関係の中で開発されていく。特に、子どもの場合、その自我形成にかかわり、大きな影響を与えるのが「意味のある他者」(significant other) である。この「意味のある他者」には、祖父母、母親、父親及び兄弟姉妹だけではなく、遊び仲間、クラスメート、先生、そしてマス・メディアなども含まれる。そして、「意味のある他者」は人間の成長・発達や社会の変化・変容によって変わり、「意味のある他者」の自分に対する期待、要求・要請、気持ち、感情及び意図の有り様、そしてまた、自分に対してどのような意見や態度を示し、いかなる評価や判断、あるいは規定づけを行っているのか、といったことが、人間の自我形成にとっては、極めて重要な事柄になるという¹⁴⁾。

このように、人間というのは、「他者」との相互的な関係が極めて重要である。人間は、日常的にかかわりあう他者と「共に」、社会的経験を積み重ねながら、自己を形成し自分自身を成長させ、自己を確立しようとする社

会的存在なのである。日常生活においても、人間は常に「他者」の存在を求め、自分以外の多くの他者と向かい合い、お互いに依存し合いながら生きている。そして、お互いに連帯し合いながら共同体を形成して「共に」生きる。「共に」生き続けていく。互いに相手を前提とし合って存在し、歴史的に生き続けているのである。そのような意味では、「生は単に個人の生に限られず、他者の生でもあり、さまざまな共同体の生であり、さらに人類の生でもある¹⁵⁾」。

そしてさらに、人間というのは、誰もが日々の生活を営む中で、自分自身が一体誰であるのか（一何者であるか）を見だし、自己を解釈し確定して、他者に明らかにしなければならない。すなわち、証明しなければならないのである。自分が「自分である」ということ、あるいは〈私〉が私自身であるということ进行を明らかにすることは、人間存在の重要な条件であるだろう。人間が真の自分自身であろうとする願いを忘れ、真の自己を失い、個性やアイデンティティを欠落した自己は、「物的財貨の生産＝消費を強制される中で、自分の内なる願いを疎外されて生きる人間類型にほかならない。そうした経済的利害関心が自己本来の欲求に反することを、もはや認めえなくなった人間は、その社会システムの中で、みずからまた〈商品〉のように操作されることにならざるをえない¹⁶⁾」のである。フロムは著書『生きるということ』(To Have or to Be?)の中で、次のような興味深い指摘を行っている。「私たち人間には、ありたいという生来の深く根ざした欲求がある。それは自分の能力を表現し、能動性を持ち、他人と結びつき、利己心の独房からのがれ出たいという欲求である。この所説の真実性を証明する証拠はあまりにも多いので、それだけで容易に一冊の本が埋まるだろう¹⁷⁾」と。このような欲求は、類人猿や草花などにはない比類なき人間固有のものであると明言できるだろう。

そして、自分がどのような「自分である」かを証明するためには、自分が自分自身と無関係な姿勢であってはならない。自分は、しっかりと自分とかかわり向き合わなければならない。他者の目で自己をみなければなら

ない。メイによると、「あたかも外側からのように、自己自身を客観視できるこの能力こそ、人間を人間たらしめている特性である¹⁸⁾」という。しかし、そこでも、自分自身が誰であるかを知るのは、たった一人、自己しかない空中や宇宙世界においてではない。あくまでも、事実として、我が身体を置く足場、例えば地域社会といった実際的な人間の身体の足場が必要であり、複数の他者—地域社会であれば、そこに住居している多くの地域住民—との様々な相互的な関係を通じて営まれる具体的な生活の中において可能なのである。

要するに、「他者との出会いや交わりをつうじて、人は自分が個別的な存在だということを知り、自分と他者との相互の認識によって、人びとは人間や自己自身を広い視野で理解できるようになる¹⁹⁾」のである。カッシーラーの指摘に従えば、「人間は、社会生活を媒介としない限り、自らを見出すことはできず、自己の個性を知り得ない。しかし、人間にとって、この社会生活という媒介は、外部から個人を限定する力以上のものを意味する。人間は、動物のごとく、社会の規則に従うが、それに加うるに社会生活の形成をつくり上げるための積極的な貢献およびこの形式を変化させる積極的な力をもっている²⁰⁾」のである。

ただし、自己と他者との相互的な関係、自己と社会との相互的な関係は、常に友好的な状態にあるわけではなく、敵対的な状態が続き、そこに、人間としての混乱、悩み、苦しみ、そして葛藤を経験することになる。むろん、人間が人間として成長するためには、いずれか一方の状態のみではなく、双方の状態が必要であろうし、実際的にも双方の状態が生じているのが事実なのである。自己と他者とがお互いに「個」を主張し合って譲らず、お互いが優位に立とうとしたり、否定し合う場合がある。無思慮になり、意味不明な言葉をまくしたて、悪を選択し、弱い立場の他者を平気でおとし入れる。自分だけが善人だと錯覚し、自己中心的な行動をとる。人間は、高潔で崇高な思いをもつが、他方で人間の頭に銃弾を打ち込んだり原子爆弾を投下したりもする。「人間は、矛盾にみちた理屈で割りきることで

ない精神によって、お互いに対立し、対決するように振舞わされていることなく非合理的な存在者であって、これが、私たち『人間である姿』なのである。そして、私たちが人間になろうとするほど、存在者としての非合理性はますます高まってゆく²¹⁾」という側面があることを忘れてはならない。

ところで、近年では、現代における現代的諸課題の考察にあたって、ややもするとあまり重要視されなかった「個人の視点」からの議論の在り方が高まりつつあるように見受けられる。我々もまた、後章において、個人の視点から、すなわち、現代社会の中で生きている〈私〉の視点から情報化の進展にかかわる問題を取り扱う。では何故、これまで用いてきた「人間」という表現ではなく、あえて〈私〉という言葉を用いようとするのか。ここでは、哲学的、論理的な深い議論は不可能であるので、より実地的な考えを示さざるを得ないが、最近の〈私〉の使われ方は、自身自身が生きている場において、一人ひとりが自分自身の課題として、実際に起きている現代的諸課題の存在性を強く認識し、自ら真剣に考え、実際に起きている様々な事柄を、より身近に引き付けて理解してもらう、あるいは理解すべきである、とする意図からではないかと考える。

考えてみれば、我々はみな、複数の人間の中の一人ないし「人びと」のうちの一入であることに相違はないが、あえて、〈私〉という一個の人格、他人とは異なった日常生活を過ごしている具体的な自己としての〈私〉の姿というイメージを強調するには、従来使用される「人間」という表現では、あくまで抽象性が残ってしまう。それは、「私たち」や「個々人」という表現方法も同様であろう。人間には、自分自身の「生」の営み方に違いがある。それぞれに生きているのである。〈私〉の「生」の営み方は、すべて「人びと」や「私たち」という集団行動に還元することのできないものである。一人ひとりがその生き方において、それぞれ相違があり、〈私〉という自分は全宇宙の中でたった一つの個性を有している存在なのである。

要するに、新氏の表現を借れば、「抽象的な『個人』とか『人間』とい

う捉え方には、その人なりの生活のありさまが、その社会の一般的な形でしかみえないという弱さがある。『私』という捉え方は、『生活』とか『日常生活』を『私』を基点とした自分の生活世界として意味づけ、自分の生き方の見通し^{パースペクティブ}をひろげていくという視点を含んでいる²²⁾のである。むろん、このような〈私〉は、〈私〉以外のすべての他者と互いにまったく同等の「生」を持ち、同等・平等の存在であり、誰もがいつでも一個の人格を有する〈私〉であることに変わりはない。

しかしながら、それは、あくまで、すべての他者から遠く離れたり、他者との関係を切断したり、分断した存在として〈私〉を表現するものではない。いや、むしろ、世界に固有の存在としての〈私〉が〈私〉として成立するためには、「私をみずからの同類・仲間とみなしてさまざまな仕方で能動的に働きかけてくるものの存在が不可欠²³⁾」であり、〈私〉は、「私に働きかけてくる他の私なしには成立しえないのである。この意味で、私はその成立を全面的に他の私に依存している²⁴⁾」とする認識が必要であり、没交渉的な孤立した「個」ではない点に注意すべきであろう。

3. 現代社会の中の人間 — 〈私〉の生活—

「現代を解く鍵として『生命』を理解するには、それが非常に根源的な問いでありながら、一方で日常生活とも密接に関わり合うものであるという視点を必要とする²⁵⁾」とともに、社会的存在としての人間の生きている姿、人間存在の意義を理解する上でも、具体的なこの世の生活を取り扱うことは有益であろう。

人間の一生は誕生から開始する。そして、ゲーレンがいうように、「人間はただ生きるのではない、その生を導くのだと言おうか。冗談でもなければ絵空事の暇つぶしでもなく切羽つまってそうするのである²⁶⁾」とする指摘をそのまま受け入れるとすれば、人間の「生活」とは、人間が一日一日を無目的に、少しずつ老いて逃れられない死に至るまで、ただ漫然と過ご

す受動的な行為であるとは考えられない。フロムもまた、著書『希望の革命』(*The Revolution of Hope*)の中で、「人間というシステムは、物質的な欲求だけが満たされて、生理的な生存が保証されても、人間独特の欲求や能力—愛、思いやり、理性、喜び、など—が満足させられなければ、本来の機能を発揮しない²⁷⁾」という点を強く論じたように、人間は「生きていく」より積極的な生活行為であり、人間本来の汗を激しく流し、思索と創造を行い、学習を繰り返しつつ体験・経験を積み重ね、時には勇敢に自分の限界にチャレンジし、全体としてより「人間らしく」生活することを希望しつつ営む行為であり、また常にそうでありたいと感ずるのは筆者のみではないだろう。

人間というのは高度で精巧な機密機械ではなく、洗練し鍛え抜かれた類人猿でもない。人間は自分の存在を明らかに意識することが可能であり、自己の行為に意識的に責任を持ち得る人格を有した存在である。そして基本的に自由である。「自由である人間一人一人の生命相互の関係は平等であ²⁸⁾り、この世にあるすべての人間が基本的に自由であり平等であり、同一の可能性を内に秘めた存在として一般的には理解されている²⁹⁾。確かに、既述したように、人間は非合理的な側面を持ち、また非理性的で非論理的な側面を持つ存在者であることは否定し得ないが、通常的生活においては、明快で道徳的・倫理的存在として了解され、合目的で責任ある存在者として振る舞っている。また、「人間は、いつの日か存在しなくなることを知っているばかりでなく、自分自身の選択によって、自分自身の存在を止めたり、失ったりすることもできるのである³⁰⁾」。

要するに、人間は、日常生活において自己の行為に自ら責任を持つ主体、自由に選択できる主体—むろん、現実の生活の場面においては完全に自由な選択というものはあり得ず、常に何らかの制限や制約を受けているのだが—であることを直観し、毎日の生活を営む中で实际的に体験し、過去の人間が経験してきたように、誰もがいずれ老い、そして絶対的に約束されているように死ぬ存在であることをもはや自明の理として理解しているの

でないだろうか。そして、人間「社会は、すべてにおいて、それを前提として動いているのである。結婚するのも、教育するのも、信用したり約束したりするのも、犯罪を取締まるのも、商法、民法、刑法など様々な法律があるのも、すべて人間が、自由であり、自己の行為に責任を持つ生命的な存在だからである³¹⁾」といえよう。

さて、人間の生活の主体は、あくまで人間であり、〈私〉が自分自身の生活の中心人物である。一般的に考えて、日々具体的な体験・経験を積み重ねながら営んでいる「生活」というのはそれぞれ多様で千差万別であり、同一パターンでの生活状況というものには存在しないし、展開されないように思える。まさしく、「個性」的であり、「個別」的であるとも表現できる。しかしながら、よくよく一人ひとりをみれば、日常的に営まれている人間の生活には、ある程度の規則性（一定の形態）や傾向性をもって繰り返し行われている。この点についても、経験的に我々の理解するところであろう。

そこで、「生活」については、次に述べる四つの一般的特性を持つものとして説明することも可能である³²⁾。それは、先ず第一に、生活が自明の恒常的基盤という点についてである。生活ということは、我々人間存在の原点ないし基盤（基層）であるとともにその全体を意味するものであるといつてよい。したがって、この生活という言葉は、我々の感性や常識に、つまり、人間の意識の基層に息づいている公共的な日常的概念であり、あらためて問うことを要しない自明の与件・前提であって、コミュニケーションの共同の出発点をなしているものと説明することができる。第二に、生活が融合、交差及び媒介の場だという点である。「生活」は人間にとっての原点ないし基盤（基層）であるという意味だけではなく、外化対象化され、分節制度化された歴史的社会的諸領域と自己とを結ぶ「手」の役割（＝媒介環・結合織としての機能）を有している。すなわち、生活というのは、政治、経済、教育ないし文化などあらゆる問題をめぐって「個人」と「社会」とが関係する場である。また、「歴史的伝統的なもの」と

「現代的今日的なもの」とが交差する場であり、さらには人格における「内的なもの」と「外的なもの」とが媒介される場、すなわち、内面的なものが形態化するとともに、外的なものが主観的意味を帯びる場でもあるということである。第三に、生活が意味の形成と受容の場だという点である。人格における「内的なもの」と「外的なもの」という問題は、〈意味〉の問題にかかわりを持つ。周知のように、人間というのは物理的世界、物質的世界に住んでいるだけではなく、〈意味〉の世界、〈価値〉の世界にも住んでいる。〈意味〉ということは、人びとが事柄をどのように捉え、どのように評価し、どのような目的をもって行為するかにかかわる重要な問題である。それは、主観的には人びとの志向の方向や評価の仕方、人生観や価値観にかかわり、より客観的な形では生活の様式や「生きざま」にかかわる問題である。さらに、社会的歴史的次元においては、社会システムの性格や社会規範にかかわる問題である。要するに、あらゆるところで人間は、〈意味〉に、そしてまた文化にとらわれている存在でもあると説明し得るのである。そして第四に、生活が現実的実践的性格を持つという点である。一般的に言って、「生活」とは「生き生きと活動する」ということを意味し、様々なものを獲得・利用し、生命と生活を維持・発展させていく過程である。生活は、自己の世界をつくっていく「制作の場」であり、人格形成にも社会改革にも手掛かりを与えるところの客観的な主体的実践的場ということができる。

それからまた、システム論的な観点を導入して、「生活」をシステムとして捉えてみると、人間が日々繰り広げている「生活」とは、おおむね、身体を有している〈私〉という生活者が、自己の様々な生活欲求上の充足を基本点として反復性・継続性をもって営む物事の連鎖系であり、またこの営みの場面の総称であると述べることができよう。具体的な身体を持った〈私〉が、複数の他者との様々ななかかわりあいにおいて行う行為の総体といってもよい。一人ひとりの〈私〉の様々な生活欲求を充足するために、可能な諸条件のもとに自分の生活諸要素を組み合わせながら、人間が日々ダ

イナミックに繰り返している生活状況の全体像を「生活体系（＝生活システム）」³³⁾と称することもできよう。松原氏は「生活体系」について次のように述べている。「一言にしていうならば、生きるために人が行なう生活行為の動態的なシステムである。非常に一般的ないい方をすれば、人間が生活するというのは、『生きていく』ことの表現である。『生きていく』というの、人間にとって『生きて何かしている』状態であるし、もっとつきつめれば、『生きることを何かしている』状態であるともいえる³⁴⁾」。「もし、社会学が、この生活体系へのシステムの追求をなしえて、それがよりよき生活を目指す人間のいとなみに資するところがあるとするならば、人間社会の発展に、大いなるプラスがもたらされるといえよう³⁵⁾」と。確かに、生活体系の研究は人間の生活様式（ライフスタイル）、自己実現の達成、憎悪、利害、愛情、幸福（幸福感）ないし価値観の変化など様々な内容をその対象として含むものと考えられ、根本的には人間の生から死までを問題にすることから、多くの研究領域の応援を必要とするが、今後においても「生活」をその全体において捉えること、すなわち、生活の実態をより総合的・体系的に、しかも動態的に把握する理論の構築が待たれるところである。

いずれにしろ、人間の「生活」というものをどのように概念化し、定義づけようとも、人間の生活とは複雑な行為の体系そのものである。そして「生活」とは、社会的存在としての人間が、現実の社会システムにおいて正常に「生」を継続するための基本的で、欠くべからざるダイナミックな営み（行為）である。生活とは、やや面白い表現を用いれば、「日常の瑣事から人の生死を決する重大事に至るまで、あるいは、繰り返される通常の出来事から非常時の異常な出来事に至るまで、さまざまな内容とレベルの出来事が絡み合いぶつかり合ってたぎりたつ溶鉱炉³⁶⁾」とも説明することができよう。この世に生きている多くの〈私〉が、現実の限界や条件に制約され、その制約をやむなく受け入れつつも、時間の流れの中で、それぞれの〈私〉にとってより豊かで快適な自分自身の生活を思い巡らし、具体

的に組み立て、さらに学習する中で洗練して、自らの人生の意義を問いつつ生きていくと考えられるのである。

最後に、現代において生きている人間は、いま急速な情報化の進展の中にある。情報化の進展は、産業の情報化と情報サービス産業の発展を含めた情報の産業化との双方が相乗効果的な牽引力を発揮することから始まって、現在では、〈私〉の日常生活次元の奥深くまでトータルな情報化が浸透しつつあり、もはや一人として情報化から逃げられない。飛躍的な情報技術の発達をベースとしつつ加速度的にすすむ情報化の進展は、人間一人ひとりに与えるインパクトも非常に大きく、これまでの生活と比較して、その生活様式が、意図せずして一変した人びとも少なくないであろう。考えてみると、人間の生活の変化というのは、人間の意識、価値観及び志向の変化でもある。

そして、このような生活の変化は、現在も進行中であり、一たとえ数人の人間が、このような流れをかたくなに拒否しようとも一、社会全体のシステム化が展開される中で、様々な事柄を巻き込みながら進んでいくことは避けられない。やや視点を変えていえば、このような生活の変化をもたらす情報化の進展によって、〈私〉の日常生活は、「絶えずモディファイされ、古い様式は新しい様式に場を譲り、姿を消してゆく。十年単位で生活を眺めるとき、われわれがいかに古い様式の無自覚の破壊者であるかということをもざまざと見せつけられ³⁷⁾」、そのことを後悔するというよりも、人間がこの世に生まれて、かつ生きつづけるとは何かを問うことにもなりそうである。

実は、今日において情報化の進展が、その〈光〉の部分にしる〈影〉の部分にしる、大きな社会的事柄として注目を集めているのは一それは我が国も含め様々な情報メディアが浸透している先進諸国においても同様であるが一、第一に、情報化の進展が企業・産業にとどまらず、個人のレベル、〈私〉の日常生活次元にまで浸透したことによって、人類が経験し得なかったほどの複雑性と多様性が増大し、急激に人間社会全体がぐらぐらゆれて

大きく変動し、かつ進行中であること、そして第二に、情報化の進展による一つの国の変動が他の国々にまで連携し、最終的に世界的規模に拡大しているという事情による、と考えられるのである。

このような認識を踏まえて、情報化の進展そのものに関する詳細な論述は割愛するが、次章では、主に、情報化の進展に影響を受けつつ、しだいに情報化する〈私〉の生活、すなわち「生活情報化」にかかわる事柄についてごく基本的な素描を試みてもうことにしたい。

4. 情報化の進展と生活情報化

先端技術の中でも、情報化の不可欠の主要基盤であり、また、格段に大きな社会的、文化的及び経済的なインパクトを与えているのが情報技術である。情報メディア（メディアシステム）にかかわる技術は、人間の従来の身体表現の能力や知的能力の限界を突破する可能性をひらき、人間の神経や脳といったより高次の機能を拡大・拡張し、代補すべく発展して、人間のより創作的・創造的領域を飛躍的に拡大することに大きな役割を演じている³⁸⁾。今日、刻々と変容する情報メディアは、「メディア」というものの専門的、技術的領域のみの変容にとどまるものではない。人間の感覚・感性、意識、生活様式、思考ないし日常的経験を変化させ、人間と人間、人間と社会との相互的な関係を変化させ、人間社会全体を大きく変化させていることは異論の余地がないだろう。

周知のように、今日ではマルチメディアに代表されるように、多様なメディアの融合を実現するデジタル化の技術がもたらす人間社会全体へのインパクトを強調して、現代における「情報革命」とは、他ならぬ「デジタル革命」であるとする主張も見受けられる。ケルシュは次のように指摘している。いまの時代では、「結果的に、メディアとコンピュータ装置との境界線も徐々に消え去っている。インフォメーション（information）とメディア（media）という現代の最も強力な二つの技術の融合がイ

ンフォメディア時代 (Infomedia Age) をうみ出している³⁹⁾」と。このケルシュのいう「インフォメディア時代」という表現は、今日の我が国においても盛んに論議されている用語を用いれば、「マルチメディア時代」ないし「マルチメディア社会」とほぼ同義と考えられるものである。

振り返って、現代社会の中で、およそ人間が人間的な生活を営もうとするなら、極めて単純に言えば、「情報」の入手（収集）・加工・蓄積（貯蔵）・利用（活用）は不可避である。むろん、どのような時代にあっても、通常的生活状況にあっては、日常的に情報を利用することなしに人びとの日常生活は快適なものとはならなかったであろう。ただし、過去の時代において、例えば、戦前の日本社会のように、社会の急激な変化もなくゆるやかな変化にとどまり、個人の生活様式（ライフスタイル）も日々大きく変化することなく、そしてまた、現代のように価値観や生活意識が多様化・多層化していなかった時代において、通常的生活を送っているごく一般的な人びとにとってはさほど瞬時に新たに情報を入手したり、先端的な情報メディアの絶対的な必要性は高くなかったといえる。

ところが、現代においては、情報や情報メディアを頼りとする生活、すなわち、情報や情報メディアへ依存する比重がますます高まりつつあり、「情報重視型生活」ないしは「情報ベース型生活⁴⁰⁾」と呼び得るような生活状況があらわれつつある。とりわけ、経済的豊かさと生活の安全性などを日常的に維持しつつ、さらに精神的豊かさやゆとりなど、より高次の欲求を満たそうとする志向が強まれば強まるほど、情報や情報メディアへの依存比重が高まるし、高めざるを得ないと考えられる。そしてまた、大量で、かつ短時間に正確で信頼性の高い情報を入手したいと望めば望むほど、情報メディアの利便性と多機能性などが必要要件となる。当然、情報メディアの種類も増え、いつの間にか、自分の身の回りには様々な情報メディアが置かれているという状況にあり、それが、現代における平均的な人びとの生活実態なのである。水野氏は、情報社会においてあらわれつつある新たな生活様式を「情報的ライフスタイル」と呼び⁴¹⁾、その特徴として次の

五つの点をあげている。すなわち、まず第一に、様々な情報メディア（これらは、総体として「メディアシステム」を成す）への依存がある。第二に、情報過剰状況の中で、個人がより主体的に情報を選択するようになる。第三に、生活が個別化し、それに対応して個々の生活ニーズを満たすのに必要な情報行動（メディアの所有や情報、あるいは情報サービスの利用）が個別化する。第四に、家庭の中では、娯楽情報にもまして生活情報が重要な位置を占めてくる。そして、第五に、情報を単に受信するだけでなく、より積極的に外部に向けて発信するという契機が生じてくる、とするものである。このような五つの特徴は、現代における「生活情報化」の特徴そのものであるといえよう。

これまで、述べてきたように、今日では、飛躍的な情報技術の発達などに伴って、短時間にして新しい形態、機能及び特性などを備えた情報メディアが登場し、個々人の家庭、一人ひとりの日常生活にまで広く普及し利用されている。情報や情報メディアへの依存も一層進み、このような傾向は生活全般にわたりつつあるといえる。特に、現代にみられる特徴として、従来はマスメディア（テレビ、ラジオ及び新聞・雑誌・本など）と接したり利用する割合が圧倒的に多かったが、現代ではパソコン、ワープロ、携帯型情報端末及び携帯電話・PHS など、いわゆるパーソナルメディアといわれる情報メディアに接したり利用する割合がしだいに増えていることがあげられる。個人のパーソナルメディアの利用の仕方も多面的であるが、大別すると、実用的利用の仕方と趣味・娯楽的利用の仕方とがある。例えば、実用的利用の仕方としてすぐに思いつくものとして、自分の仕事（業務）に必要な情報入手（収集）・整理・検索、生活上重要（健康管理や家計統計など）なデータ処理及び文書作成や住所録などの蓄積・検索などがあげられよう。他方、趣味・娯楽的利用の仕方としては、ゲームソフトを用いたゲーム遊び、友人同士の日常的な会話や待ち合わせ場所の確認、つりや読書といった趣味に関する特定の情報交換、新しい友だちづくり、観光地情報やチケットの入手・整理など生活を豊かにするための多くの利

用の仕方が考えられる。

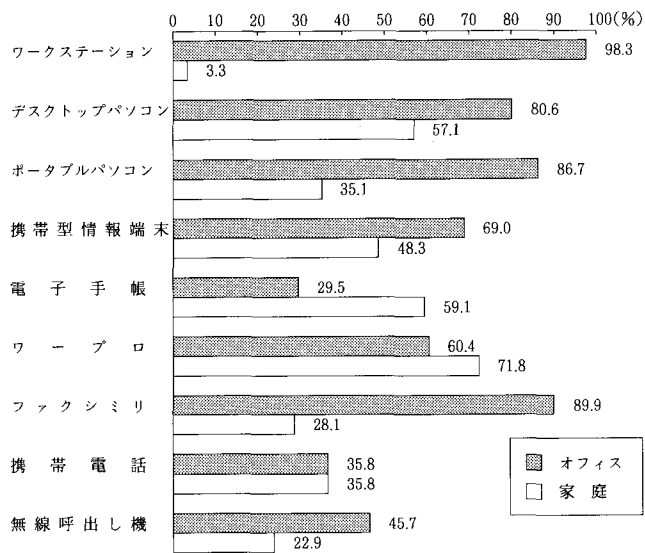
ちなみに、第4—1表は、社会的に広く普及している主要な情報メディアの普及率（全世界帯）を示したものである。表をみる限り、普及率としてはカラーテレビ、VTR及びステレオの割合が極めて高く、ワープロやパソコンの割合はまだかなり低い。しかし、ワープロ、パソコン及びファクシミリといった情報メディアの普及率はしだいに高まっており、将来的にも高まっていくことが予想される。また、第4—1図は、(財)日本情報処理開発協会が199団体1,000個人を対象として実施した情報化環境調査（調査時期は1996年2月／回収率・29.0％／回収数・290件）のうち、情報メディアの利用場所についての回答結果を示したものである。図をみる限り、全体としてはオフィスでの利用割合が高いものの、デスクトップパソコン、

第4—1表 主要な情報メディアの普及率

調査時期	ビデオディスクプレーヤー	カラオケ装置	ステレオ	C Dプレーヤー	ワープロ	パソコン	ファクシミリ	ブッシュホン	カラーテレビ	衛星放送受信装置		VTR	ビデオカメラ	
										29インチ以上	29インチ未満			
昭32.9														
35.2													2.4	
40.2			13.5										3.4	
45.2			31.2						26.3					
50.2			52.1						90.3				7.9	
55.3			57.1						98.2			2.4	8.6	
60.3			59.9						99.1			27.8	8.4	
61.3			60.5						98.9			33.5	8.5	
62.3			58.9	10.0		11.7		20.1	98.7			43.0	10.4	
63.3			58.9	16.1	14.0	9.7		25.9	99.0			53.0	11.3	
平1.3			61.2	26.8	19.8	11.6		34.5	99.3			63.7	14.9	
2.3			59.3	34.3	24.1	10.6		39.6	99.4			66.8	15.6	
3.3			57.9	41.0	28.4	11.5		47.2	99.3			71.5	23.7	
4.3	19.4	17.9	61.0	47.5	32.6	12.2	5.5	47.5	99.0	30.5	89.1	16.2	63.8	26.0
5.3	16.8	18.1	61.3	54.3	36.2	11.9	6.7	53.2	99.1	33.6	88.7	21.3	75.1	25.6
6.3	16.3	16.5	60.1	53.8	37.8	13.9	7.6	56.5	99.0	38.0	87.3	26.6	72.5	29.9
7.3	15.3	15.2	57.7	55.9	39.4	15.6	10.0	58.3	98.9	37.9	86.9	27.6	73.7	31.3
8.3	15.8	13.4	58.2	56.8	40.9	17.3	12.9	60.9	99.1	39.2	87.0	30.1	73.8	32.3

(注) ビデオカメラの昭35、40年は撮影機、昭50、55及び60～平2年は撮影機・映写機セットである。
 (出所) 経済企画庁調査局編『経済要覧』（平成9年版）、大蔵省印刷局、1997年、75—76頁（一部削除のうえ編集）より。

現代における〈私〉の存在



第4-1図 情報メディアの利用場所

(出所) 日本情報処理開発協会編『情報化白書/1996』,
コンピュータ・エージ社, 1996年, 396頁。

携帯型情報端末、電子手帳及びワープロに関しては家庭での利用割合も高く、特に電子手帳とワープロについてはオフィスより家庭での利用割合の方がかなり高いという結果が示されている。

今日における高度化し多機能化した情報メディアの登場とその効果的な利用によって、人間は、自分自身の直接体験を中心に織り成す直接的経験の世界（あるいは直接的接触の世界）から大きく飛躍して、人間に固有の身体性の限界を超えた間接的経験の世界（あるいは間接的接触の世界）を一層拡大しつつある。とりわけ、今日、世界中で急速に拡大し、すでに1億人以上を連結しているといわれるインターネットのように⁴²⁾、地球規模にわたる巨大な情報ネットワークの急激な普及・利用は、〈私〉の時間的・空間的（＝時空的）な制約を限りなく解消し、広範囲からの情報の入手が可能となり、その情報量も飛躍的に増大して、他の人びととの接触・

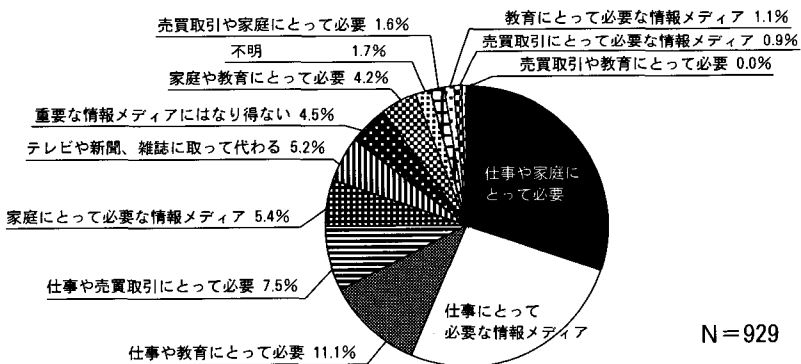
交流を活発化する。最新の情報メディアが、従来の人間の遠近感を変化させているのである。

『情報様式論』(*The Mode of Information*)を著したポスターの言葉を借りれば、「原理的に、現在においては、情報は世界中で即時に手に入れることができるし、電気が使えぬ限り情報を蓄積したり検索することが可能である。もはや、時間と空間は情報交換を限定するものではない⁴³⁾」のである。また、ポスターは、「電子メディアによって導入された、即時に得られるユニバーサル情報のプロスペクトは、明らかに、社会にはなほ深い影響を与えており、それがどこまで進行するかは、いまもって計り知れないものがある⁴⁴⁾」と指摘している。インターネットは国境の壁を超えた存在、すなわち、境界横断的なグローバルで開かれた(オープンな)情報メディアであり、誰でも自由に平等の立場で(=対等の立場)で、世界中に散らばっているインターネット利用者とのコミュニケーションが可能となる。別の表現を用いれば、日常の〈私〉の小さな生活の場が世界と直結し同時化することによって、〈私〉の生活上の一つひとつの小さな変化がだいに大きくなり、他の人びとに大きな影響や変化をもたらしたり、逆に、地球の裏側に住んでいる未だ見ぬ人種や生活習慣も異なる人間のひとことや呼び掛けが、〈私〉のこれまでの生活に衝撃的な影響を与えかねないのである。

そしてまた、生活上の様々な選択肢が増えることから可能となる選択の差別化(〈私〉だけのもの選び)や多様化、新たな価値の創造が自由に行われ、個性的で新しい発想や感性を生かした多彩な生活様式を実現する可能性も高まる。つまり、情報化は、生活の差別化や多様化を飛躍的に高めることにつながるのである。そしてさらには、従来の情報メディアの利用と比較して、マルチメディアなど最新の情報メディアを利用することによって、〈私〉が自ら自由に情報を発信して自己表現を積極的に試みる可能性が高まり、少しずつ自己実現をはかりつつ、高次の欲求としての精神的豊かさを享受する可能性も大きくなることが予想される。換言すれば、ようや

く、〈私〉＝「個」の顔と表情が見える時代がやってきたといってもよいであろう。むしろ、それは、孤立化し孤独な〈私〉＝「個」ではなく、地球的規模の情報メディアで縦横無尽につながった〈私〉＝「個」である。高度情報社会では、「従来に比べ『個』の存在が強調され、また、地球規模のネットワークにより、『個』の活躍する場が飛躍的に増大する時代になることは確かである。ここでは自分との関係性を見いだすことのできる多様な情報を編集して、ある種の環境を創造する行為が価値基準となるであろう。そしてネットワーク発展は、『個』が自分の思想や知的生産物を、その地球規模の情報環境のなかに織り込むことを、自らの生存の証とする道を拓いた⁴⁵⁾」といえるのである。なお、インターネットの必要度は今後大きくなり、社会への浸透度は一層加速化することが予測される（第4—2図参照）。

なお、ひとこと付言すれば、現代において我々が経験している情報化の急速な進展は、文化、政治ないし経済といったシステム、かつ又国全体や地域社会システムなどに多様で広範囲な社会的インパクトや影響を強く与え、さらには個人の日常生活次元にまで種々の影響を及ぼしているが、今



第4—2図 インターネットの今後の浸透予測

（出所）日本インターネット協会編『インターネット白書'97』、インプレス、1997年、69頁。

後もこのような傾向が増大することは論を待たない。そして、これまでの概念的、理論的枠組みの深い反省・再考の必要性とこれまで築き上げてきた既存のさまざまなシステムに大きな変革を鋭く迫っていることも事実である。むしろ、それは表層的な部分にとどまらず、深層的な部分にまで到達し、深層的部分における一ゆるやかにせよ劇的にせよ一変化・変容をもたらしているといえるのである。

5. 結びに代えて —若干の知見—

いま、人類は、“極めて劇的な時代”とも称し得る一つの時代を生きぬき、21世紀という新しい時代の幕開けを待っている。

しかし、正確には、「幕開けを待っている」という状態ではない。人間社会は複雑性と多様性を否応なく増大させ、現実に変化の連続である。激流のように流れ、加速し続ける変化の波に、ある時は危うく飲み込まれそうになり、ある時は果敢に対処しつつ、ここまでやってきたという感じがするのは、筆者のみであろうか。

まもなく、新たな世紀が到来する。フォセールの言葉を借用すれば、「新しい世界の幕開けを告げる出来事の一覧表⁴⁶⁾」はとても長い「一覧表」となり、人類は、ある程度の予測と心積もりをしてきたともいえる。だが、「いま21世紀を迎えるに当って、人類は一体いかなる挑戦を受けているのか、その焦眉の課題は何か改めて考えさせられ⁴⁷⁾」、「人間が人間らしく生きるために何が必要で、何が必要でないのか、絶えず生の原型に照らして考えてみる必要が⁴⁸⁾」あるのもまた確かである。何故なら、「高度情報社会」といわれる現代社会において、そして遠い未来社会においても、その主役は、人工的な最先端のハードウェアでも沢山のコンピュータ・ソフトでもない。あくまでも、主役は「人間」であり、生きている一人ひとりの人間、生命をもった〈私〉そのものであるからである。

数年前に公表された我が国の「第13次国民生活審議会総合政策部会」が

とりまとめた「個人の生活を重視する社会へ」と題する報告書（一次）の中には、今後は企業中心社会の変革を進めて、個人の生活を重視する（＝個人生活優先）社会の形成、つまり、個人を主役とする社会システムを形成することが重要であるとし、このような社会システムにおいては、「独立した『個』としての価値観を持って、個人生活を大切に、幅広い領域において自己実現を試みていく。個人が自己の人間性の質的な向上を目指して生活の充実を図るとともに、他人の人間性や価値観も尊重していく結果、社会全体として画一的でない多様な生き方が可能となる⁴⁹⁾」とする内容が記されている。このような報告書の内容から考えても、21世紀社会においては、—これまでの〈私〉という用語を用いれば—〈私〉の基本的人権が保障され、〈私〉という一人ひとりの自主性、主体性が尊重されるとともに、他者や社会全体に対する〈私〉の義務と責任の遂行が一層重要視される論調が高まる予感がする。振り返ってみると、今日でも、情報化の進展と人間に関して展開されている議論は、〈私〉という個人の視点を重視した議論の展開、例えば、〈私〉にとって情報化とは何か（〈私〉にとって情報化の進展はどんな意味があるのか）、情報化の進展が〈私〉をどんなふうに変えるのだろうか、情報化の進展によって〈私〉はどんなふうになるのか、あるいはまた、高度情報社会の中で〈私〉はどんなふう生きていくべきなのか、といった議論は、さほど多くはないように思える⁵⁰⁾。

このような意味で、情報化の進展に直面している〈私〉の視点から、情報と情報化の進展にかかわる〈私〉の種々の状況や問題点を検討することは、このような時代において一つの意義を有するものと明言できよう。現在のところ、筆者が知る限りでは、いろいろな角度や方向からの議論はあるにせよ、電子管理化された社会システムの登場、あるいは人間が作り出したロボットやコピー（例えば、クローン人間）が主役を演ずる社会への待望論は見受けられないように思う。

いずれにしろ、現代の情報化現象と情報化の進展にかかわる諸問題に関しては、これまで筆者も含め数多くの研究者が何度となく取り上げ、様々

なワードを駆使して表現し論じてきたが、依然として、語り尽くすことができない。しかし、近年では一定の研究分野・領域を超えて、多角的・多面的な観点から、情報及び情報化の進展と社会システムとの関係・関連などについて活発に論議されており、このような動向は実に好ましいことであるといえる。また、最近では地域社会の情報化にかかわる議論もかなり活発に行われ、研究成果も公表されており、いわゆる「地域情報化」の在り方や可能性などにする論議がホットな話題にもなっている。その意味では、新しい時代が求めている議論の一つの方向性なのかもしれない。そして、筆者としては、どのような論議にせよ、情報及び情報化の進展と社会システムとの関係・関連を論ずるさい、人間の「存在」、自己としての〈私〉を完全に失った議論や軽視した考察にどれほどの価値があり、そこから何が生まれるのか、と問いたい。このような議論や考察に関しては大きな疑問を持っているものの一人である。

かくして、「高度情報社会」といわれる現代社会にかかわる種々の論議、あるいは情報化の進展が社会全体に及ぼす影響などについて論じるさいには、その〈光〉の側面であろうと〈影〉の側面についてであろうと、まずは生きている“顔”をもった人間の視点ないし〈私〉の視点一日々の生活を過ごす生活の匂いのする生活の主体者としての側面を表現するために、あえて〈私〉という表現から〈生活者〉という表現に替えてもよいだろう一からの考察が重要であると考えている。

注

- 1) 筆者の最新著『高度情報社会と人間一日常生活・情報・マルチメディア』（松籟社、1997年）では、現代社会を「高度情報社会」と位置づけ、「高度情報社会」の持つ表裏や功罪について、さらには21世紀社会システムの展望などについても議論を試みているので、興味のある方はぜひご一読いただきたい。
- 2) Naisbitt, J., *Global Paradox: The Bigger the World Economy, the more Powerful its Smallest Players*, New York: Avon, 1994, p. 5.

- 3) 清水 博「生命科学から見た生命」河合他編集『生命と科学』(岩波講座 宗教と科学6), 岩波書店, 1993年, 12—13頁。
- 4) 小島陽之助・上田哲男「細胞レベルにおける生命」石井他編集『生命現象のダイナミズム』, 中山書店, 1984年, 61頁。なお, 生命体(=生命システム)に関する検討, さらにシステムと情報との関連に関する検討については, 村上則夫『システムと情報』, 松籟社, 1995年も参照されたい。
- 5) 多田富雄『生命の意味論』, 新潮社, 1997年, 198頁。
- 6) Popper, K. R., *The Poverty of Historicism*, London: Routledge & Kegan Paul, 1957, pp. 76—77.
- 7) 中村桂子「物語としての生命」河合他編集『生命と科学』(岩波講座 宗教と科学6), 岩波書店, 1993年, 301頁。なお, 「ゲノム」(genom (e))に関する詳細な説明については, 同稿を参照していただきたいが, 同稿では, 「『ゲノム』とは生物の染色体にある DNA の総称をいう。ヒトの場合ならヒトゲノム。その中には, ヒトという生物の体をつくりあげ, それをはたかせるために必要な情報のすべてが入っている」(同稿, 285頁), あるいは「一つの生物が持つ DNA 全体, もう少し正確にいうと『染色体に含まれる DNA のすべて』, つまりゲノムに眼が向く」(同稿, 289頁)という説明が散見される。
- 8) 中村 清「教育および教育学における『老いと死』」岡田編『老いと死—一人間形成論的考察—』, 玉川大学出版部, 1994年, 83頁。
- 9) 我々は, 人間のこの世の「死」にはそれぞれ意味があり, まったく意味のない「死」はないと考えている。かなり単純な意見かもしれないが, 一人の人間の一生の最後の場面である「死」が無意味であるとするなら, この世の人生の意味もかなり軽いものにはならないだろうか。この点に関しては, 種々の見解があろう。参考までに, 中村氏の見解を紹介しておこう。中村氏は次のように述べている。「死者には気の毒であるが, その当人の心情的満足を超えた社会的意味を考えると, 実際には, 無意味な死もまた無数にあるということを認めざるをえない。これもまた冷徹な人生の事実である。老いと死を考慮する場合, 我々は, 人生に対するこのような醒めた見方をも要求されるであろう」(同上稿, 82頁)と。
- 10) 中村桂子「物語としての生命」上掲稿, 304—305頁。
- 11) Bertalanffy, L. von., *Das biologische Weltbild. I : Dis Stellung des Lebens in Natur und Wissenschaft*, Bern: A. Francke AG. 1949 (長野・飯島訳『生命—有機体論の考察—』, みすず書房, 1974年, 14頁)。
- 12) 暉峻淑子『豊かさとは何か』, 岩波書店, 1989年, 235頁。暉峻氏は指摘する。「私たちは食物, 暖かさ, 眠り, 愛し愛されること, 社会からはじき出されないこと, 教育, 信念, 文化的活動, 政治参加などのすべてに対す

- る欲求を持つ者として、全体として生きるのである。それが自己実現である」(同書, 235頁)と。
- 13) ミードの見解は下記の文献を参照されたい。Mead, G. H., *Mind, Self, and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago: The University of Chicago Press, 1934 (稲葉他訳『精神・自我・社会』, 青木書店, 1973年)。
- 14) この点に関しては、船津 衛「『自我』の社会学」井上他編集『自我・主体・アイデンティティ』(岩波講座 現代社会学2), 岩波書店, 1995年, 49-50頁を参考としている。
- 15) 石田三千雄「生命—身体—精神—他者」隈元・熊谷編『人間論の可能性』, 昭和堂, 1994年, 155頁。ただし、日常的に、我々が口にする言葉、つまり、「結局、人間は一人であり、一人で死ぬんだ」という言葉は否定しない。この点について、筆者の考えと大庭 健氏の見解は一致している。大庭氏は、自著『他者とは誰のことか—自己組織システムの倫理学—』(勁草書房, 1989年)において、次のように述べている。「人間は、結局はひとり生き、ひとり死ぬしかない。こうした言い方の厳粛な真理性を、私は否定しない。どんなに苦楽を〈共に〉し、一心同体に〈共に〉生きようと努めたところで、その「同体」なるはずの相手の胃袋に穴が空いたとき、その激烈な神経興奮は相手の脳髄に達して行き止まりなのであって、この自分は痛くも痒くもない。(身をよじる相手を前にして痛くも痒くもないことが、このうえなく後ろめたく・やるせないとしても、である)」(同書, 14頁)と。
- 16) 宮田光雄「個の存在と自覚—人間であること人間になること—」河合他編集『人間の生き方』(岩波講座 宗教と科学10), 岩波書店, 1996年, 243頁。
- 17) Fromm, E., *To Have or to Be?*, New York: Harper & Row, 1976 (佐野訳『生きるということ』, 紀伊國屋書店, 1977年, 142頁)。
- 18) May, R., *Man's Search for Himself*, New York: W. W. Norton & Company, 1953 (小野他訳『失われし自己をもとめて [改訳版]』, 誠信書房, 1995年, 88頁)。
- 19) 山岸 健「生活の場面」青池他『日常生活とコミュニケーション』, 慶應通信, 1986年, 230頁。
- 20) Cassirer, E., *An Essay on Man*, New Haven: Yale University Press, 1944 (宮城訳『人間—シンボルを操るもの—』, 岩波書店, 1997年, 469-470頁)。
- 21) 時実利彦『人間であること』, 岩波書店, 1970年, 199頁。また、時実氏は、「人間であるための宿命であるこの対立、対決の処理の仕方に、人類の

将来がかかっているのであって、ここに、ザイン (Sein) としての『人間である姿』の生物的存在者としてではない、ゾルレン (Sollen) としての『人間であるべき姿』の価値的存在者の心構え、振舞いが要請されているのである」(同書、212頁)とする見解をあらわしているが、この見解は実に示唆的である。

- 22) 新 睦人「情報社会と日常生活」濱口編著『高度情報社会と日本のゆくえ』, 日本放送出版協会, 1986年, 107頁。
- 23) 斎藤慶典「『我々』の論理と『私』の論理—あるいは『等しいもの』と『他なるもの』—」池上他編『自己と他者—さまざまな自己との出会い—」(叢書《エチカ》第3巻), 昭和堂, 1994年, 146頁。
- 24) 同上稿, 146頁。
- 25) 中村桂子「物語としての生命」上掲稿, 295頁。
- 26) Gehlen, A., *Der Mensch: Seine Natur und seine Stellung in der Welt*, Frankfurt am Main/Bonn: Athenäum Verlag (平野訳『人間—その本性および世界における位置—』, 法政大学出版局, 1985年, 12頁)。また、ゲーレンいわく、「人間は自分のなかに課題を見いだす生物であり、それゆえ自己を解釈する必要がある」(同訳書, 11頁)とも指摘している。人間がこの世に生きて在るとは、そのまま課題なのであり、人間の日々の「生活」とは、課題を見いだす自己自身と常に対座する営みとも考えられる。そして、それは往々にして、辛く苦しい痛みを伴うものであるといえよう。
- 27) Fromm, E., *The Revolution of Hope: Toward a Humanized Technology*, New York: Harper & Row, 1970 (作田・佐野訳『希望の革命《改訂版》』, 紀伊國屋書店, 1977年, 200頁)。
- 28) 幸津國生『現代社会と哲学の欲求—いま人間として生きることと人権の思想—』, 弘文堂, 1996年, 39頁。
- 29) 一般的に、人間は「生れながらに平等である」とする考え方が支配的であるように思われるが、哲学者の湯田氏は、人間が生まれながらして平等であるという主張は幻想であり、徹底して不平等であると、著書『人間—新しいヒューマニティの探究—』(大東出版社, 1990年)の中で明確に主張している。例えば、著書の中の主張をあげてみると、「自然的に人間は不平等である。人が同一の活力, 同一の敏捷さ, 同一の健康あるいは知性, 記憶力を有しないことは明らかである。身体的ならびに精神的な平等だけでなく、道徳的な平等でさえ存在しないのである。人間は至るところで同一の尊厳, 同一の価値を持っていると言われるけれども、そのようなことは現実にはあり得ない。実に、人間は生まれながらにして不平等である」(同書, 77—78頁)と記している。この問題の重要性は高いが、小さき一研究

- 者である筆者には、到底考えの及ぶものではなく、また、哲学の専門研究者でもないことから、ここでの議論は断念せざるを得ない。
- 30) May, R., *The Discovery of Being: Writings in Existential Psychology*, New York: W. W. Norton, 1986, p. 97.
- 31) 山口 實『生命のメタフィジックス』, TBS ブリタニカ, 1993年, 3頁。
- 32) ここで展開している四つの一般的特性に関しては、岸本晴雄「生活と経験」岸本・津田『現代人間論への視座—文化・生活・意味—』, 法律文化社, 1993年, 108—115頁を参考としている。
- 33) 「生活システム」に関しては、新 睦人「家庭と生活システム」新・中野『社会システムの考え方—人間社会の知的設計—』(有斐閣選書), 有斐閣, 1981年, 220—226頁を参照されたい。新氏が提示している生活システムとは、「特定の生活主体が(自己の営みによって)自らのさまざまな生活欲求を充たすために、(社会的・文化的・心理的・生物的・生態的な諸側面の複合的な場面において)生活諸要素を持続的・反復的に制御しながら(意識的・無意識的に)構成している全体の布置状況」(同稿, 222頁)である。
- 34) 松原治郎『コミュニティの社会学』(現代社会学叢書), 東京大学出版会, 1978年, 200頁。
- 35) 同上書, 199頁。松原氏の説明によれば、過去、社会学者がもっぱら追求してきたのは、「共同」の事実でしかなく、「生活」そのものではなかった。社会学は、「生活」そのものの解明を直接の対象から遠ざけ、生活のそれぞれ一端として現象する集団化の過程のみを問題としていた。それは同時に、現代社会において、全体として疎外される人間存在そのものの解明を見失わしめることでもあった。この点への反省に立つことが、生活研究の大前提であろう、と述べている。
- 36) 岸本晴雄「生活と経験」上掲稿, 109頁。
- 37) 太田直道「現代における美と文化の病理」種村他『『豊かな日本』の病理』, 青木書店, 1991年, 160頁。
- 38) 村上則夫「マルチメディアと人間」『長崎県立大学論集』, 第30巻第2号, 長崎県立大学学術研究会, 1996年, 66—67頁。
- 39) Koelsch, F., *The Infomedia Revolution: How It Is Changing Our World and Your Life*, Toronto: McGraw-Hill Ryerson, 1995, p. xvi.
- 40) ドラッカーは、1988年に発表した論文(Cf. Drucker, P. F., “The Coming of the New Organization”, *Harvard Business Review*, January-February 1988, pp. 45-53.)で、未来における組織の在り方を「情報ベース型組織」(information-based organization)と称したが、本文中の「情報ベース型生活」は、このドラッカーの提案した用語に着想を得ている。
- 41) 水野氏が示している「情報のライフスタイル」に関しては、以下の文献

- を参照されたい。水野博介「ライフスタイルと家庭情報環境の変化」児島・橋元編著『変わるメディアと社会生活』、ミネルヴァ書房、1995年、94—113頁。
- 42) 「インターネット」の発展に関しては、村上則夫『高度情報社会と人間』、上掲書、第三章を参照されたい。
- 43) Poster, M., *The Mode of Information: Poststructuralism and Social Context*, Cambridge: Polity Press, 1990, p. 2.
- 44) *Ibid.*, p. 3.
- 45) 小檜山賢二『地球システムとしてのマルチメディア』、NTT 出版、1996年、247—248頁。
- 46) Fossaert, R., *Le Monde 21^e siècle: Une théorie des systèmes mondiaux*, Paris: Fayard, 1991 (河野・水島訳『21世紀の世界システム』、岩波書店、1996年、1頁)。
- 47) 高瀬 淨『現代社会科学の射程—世紀末思想を超えるもの—』、1997年、288頁。
- 48) 同上書、「はじめに」(iv) より。
- 49) 経済企画庁国民生活局編『個人の生活を重視する社会へ』(第13次国民生活審議会総合政策部会一次報告)、大蔵省印刷局、1992年、12頁。ただし、報告書で述べられている「個人の生活を重視する」という表現は、いわゆる極端な個人主義的ないし自分主義(他者に無関心な自分中心的な考え方・生き方)的な意味合いを含むものではない。この点については、誤解を生じかねないので、ぜひ、報告書自体を読んでもらいたい。
- 50) このような問題への関心は、下記の文献から多くのヒントを得ている。守弘仁志『『情報化』の問題と〈私〉の問題』守弘他『情報化の中の〈私〉』、福村出版、1996年、11—28頁。なお、ワーマンは、情報化時代で生活している人間は、すべてが自分自身を情報処理装置(information processors)としてみなさなくてはならないと指摘し、情報処理の秘訣は、自分の情報の守備範囲を、自分の生活と関係のあるものだけに絞ること、すなわち、どのような種類の情報なら時間を使って注意を向けるだけの価値があるかを慎重に選択することにある、と述べている。ワーマンの見解に関しては下記の文献を参照されたい。Cf. Wurman, R. S., *Information Anxiety*, New York: Dell Publishing Group, 1989, pp. 315—332.

付記：本稿は平成9年度文部省国際学術研究費(大学間協力研究)による研究成果の一部である。